



Title	『狗張子』巻二-五「形見の山吹」考：仏教唱導のための恋物語
Author(s)	吉藤, 岳峰
Citation	国語国文研究, 162, 15-26
Issue Date	2024-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94584
Type	journal article
File Information	162_2.pdf



『狗張子』 卷二—五 「形見の山吹」 考

—— 仏教唱導のための恋物語 ——

吉 藤 岳 峰

一、はじめに

『狗張子』は、元禄五年（一六九二年）出版の浅井了意による仮名草子である。出版書肆である林義端が著した序によれば、元禄四年に亡くなった了意が、寛文六年（一六六六年）出版の『伽婢子』の続編として書いていた遺稿をそのまま出版したものであるらしい。

義端による序には、

凡此書の作、みな本朝の奇事、近代の異聞、その文詞の富華に旨趣の深奥なる、読もの細かに**既ば、唯其見聞を**広し、談話を資るのみにあらず、兼て勸善懲惡の益あらんといふ^(一)

という文言がある。『狗張子』に収められている話は奇談・怪談であり、見聞を広めて話のタネとするため、或いは勸善懲惡を勧めるた

めのものであると宣言している。

続編を謳うだけあって、その内容の多くは『伽婢子』同様に中国白話小説を翻案した怪談である。しかし、中には『本朝神社考』や『本朝故事因縁集』といった日本の書にも手を広げて取り込んでいることが明らかになっている話もあるほか、出典が不明な話も多いなど、『伽婢子』との違いも確かにみられる。

その中で『狗張子』巻二—五「形見の山吹」は、和歌を多数含んだ恋愛物語として評され、その和歌を中心とした典拠の提示や、『伽婢子』で最も有名な一話「牡丹灯籠」の典拠『剪燈新話』「牡丹灯記」の影響の指摘など、比較的先行研究の多い話である。

「形見の山吹」に限らず、了意の仮名草子作品では和歌が度々登場する。特に男女の恋愛を扱った物語は、和歌の贈答を主とした恋愛の発展が描かれ、平安期王朝物語のような雰囲気を醸し出す。仮名草子は通常、仏教や神道、土俗信仰などの宗教観念や、風雅を主とする伝統的な美的観念を綯交ぜにしており、小説として完成したと

は言いたい内容の貧困さを文芸として形作るために、平安期の物語を参考にして和歌的知識を使っていると解釈される⁵⁾。つまり仮名草子における物語の執筆、特に「恋物語」においては、和歌の利用が当然のことであった。了意も例にもれず和歌を利用しており、「形見の山吹」においても過去の秀歌を物語の展開に合わせて改変しながら引用するという手法が主である。その結果「文禄年中」という時代設定にもかかわらず、色好みの男が垣間見をして、和歌の贈答で恋愛を進展させるという時代錯誤な王朝文学風展開になっている。

「形見の山吹」の内容は以下の通りである。泉河の辺りに住む男、菅野喜内は風雅を求め歩き、木津の里にたどり着く。そこで母と暮らす美しい女性弥子を見かけ、隣家の夫人の計らいもあって、和歌の贈答をして恋仲になる。暫くして弥子の母が亡くなり、喜内は豊臣秀次に仕える父と共に高野山へ召集され訪れなくなる。喜内が訪れなくなったことで、弥子は病になり亡くなってしまふ。三年後、久しぶりに訪れた喜内の前には、朽ち果てた家があり、弥子の形見の小袖からは山吹の花が咲いていた。弥子の塚を見た喜内は、世のはかなさを感じ、通世して行方もしなくなる。

「形見の山吹」に特徴的なのは、死した女が幽霊として現れないという点である。幽霊が現れない以上、序の「本朝の奇事」「近代の異聞」というにはそぐわない。また、「勧善懲悪の益」となる要素も存在しない。したがってこの話は『狗張子』内において、怪談でもなければ勧善懲悪でもないという異質な存在となっている。了意の死後出版されたものである故に、義端の序の信頼性にも問題はあがるが、

「形見の山吹」において怪奇現象が起こらないということに変わりはない。ならば「形見の山吹」は、怪談集とされる『狗張子』内において、どのような意味を持っている物語なのだろうか。

「形見の山吹」において物語の核になるのは、当然ながら題にもなっている「山吹」である。崩れ落ちた弥子の家に遺されていた朽ちた黄染の小袖から生える山吹は、喜内の深い悲しみを誘い、喜内の出家を促す一因となる。物語の最大の盛り上がりは、間違いないこの場面にある。したがって、『狗張子』における「形見の山吹」の立ち位置を知るためには、まず「山吹」が持つ意味を十分に検討しなければならないと思われるのである。そして、この話が読者に示そうとしたものをも検討する必要がある。そうすることで、この話が奇談・怪談の要素が欠けているにも関わらず、『狗張子』に収録されている理由がわかるだろう。そしてそれは『狗張子』の時代背景と相まって、了意の作家としての創作姿勢が見えてくるのである。

二、和歌的伝統における山吹

「形見の山吹」は異色を放つ物語であるものの、構成自体は従来の怪談に非常に近いものである。『伽婢子』でいえば、巻四―五「幽霊逢れ夫話」、巻六―三「遊女宮木野」、巻七―五「死亦契」、巻八―三「哥を媒として契る」が挙げられる。これらの物語は、夫婦が何らかの問題によって長らく会えない状況になり、その間に妻が先立ち、ようやく帰ってきて妻の死を知り悲嘆に暮れる夫のもとに、死んだはずの妻が幽霊として現れるという構成である。「形見の山吹」も

ほぼ同じような構成をとっており、違う所は妻が現れないことのみである。しかし、その代わりとして山吹の花が男の前に姿を現わす。「形見の山吹」は、和歌を十四首含み、和歌の贈答をもって恋愛模様を描く和歌物語の体を為しているため、まずは了意の和歌利用方法を確認し、その上で伝統的な和歌や和歌物語の文脈での山吹が持つ意味やイメージを考察する必要があるだろう。

先に述べた通り、了意の行う和歌の利用は秀歌の引用が主であるが、「形見の山吹」での和歌の利用は引用だけではなく、本文にも和歌的表現技法が使われており、顕著なのは歌枕の多用である。物語冒頭、泉河の辺りに住む菅野喜内は風雅を求め、瓶の原、鹿背山を通り、物語の舞台となる木津の里に行きかかる。「泉河」「瓶の原」「鹿背山」は山城国南部の歌枕として有名な地である。了意がこれらの地名を出したのは、後に続く

都出てけふみかの原泉河 川風さむし衣かせ山

という和歌を導くためであり、かつ「泉河」「瓶の原」「鹿背山」含む木津川周辺地域には、山吹の名所として歌枕になっている「井手」の地があるためでもある。井手には橘諸兄の別宅があり、そこに多くの山吹が植えられていたことから、山吹の名所として有名になったとされる。「井手の山吹」は、鴨長明の歌論書『無明抄』にも「井手欸冬蛙事」⁶⁾として取り上げられており、当時の和歌的知識としては常識であった。当時の人間であれば、「形見の山吹」という題から、木津川周辺地域の歌枕を列挙されれば、井手という山吹の名所を想

起することができたであろう。了意は山吹を中心とした物語の展開のために、山吹にふさわしい地名を出すことを意識して、引用する和歌を選んでいたのである。

また、ただ和歌を和歌として引用するのではなく、和歌をもとにした文も本文に引用されている。

青葉まじりの遅桜もあらましかば、初花よりもめづらかなら
んものをと、

という「形見の山吹」中の文は、江本裕氏の注釈では、謡曲「大原御幸」からの引用であるとしているが、この謡曲の詞章が『平家物語』灌頂巻「大原御幸」からの引用である上、その『平家物語』も『金葉和歌集』所収の藤原盛房の歌

夏山の青葉まじりの遅桜はつはなよりもめづらしきかな

『金葉和歌集』初度本 夏二 141 藤原盛房⁸⁾

をもとにしている。了意が何をもとに引用したのかは不明だが、『平家物語』で流布したとされる一方流系の高野本では、

青葉まじりの遅桜、初花よりもめづらしく、岸のやまぶき咲き
乱れ、八重たつ雲のたえまより、山郭公の一声も、君の御幸を
まちがはなり。

高野本『平家物語』灌頂巻「大原御幸」⁹⁾

という文であることは注目される。和歌の引用のあと、すぐに「山吹」が登場するのである。なお、謡曲『大原御幸』でも「岸のやまぶき」の一文は存在するが、該当部分とは離れた箇所にある。丁意が山吹に関連させて物語の導入を書こうとして素材を探している際に、目に留まった『平家物語』の「山吹」の語のすぐ上から引用してきたという可能性はあるだろう。丁意は奈良絵本『平家物語』に自筆本があることからも、『平家物語』に関する知識は十分にあったと考えてよい。『平家物語』自体が手元にあった可能性は極めて高い。「形見の山吹」は、その導入部分から既に「山吹」を想起させる表現を巧みに紛れ込ませ、物語終盤の山吹の情景への布石としているのである。

では、実際の山吹の使用例から考えられる和歌的伝統における山吹とは、どのような存在なのか。和歌での山吹の登場は、古くは『万葉集』から見られる。無論、春の情景として花の美しさを詠んだものが多いが、高市皇子の歌では、

山吹の 立ちよそひたる 山清水 汲みに行かめど 道の知らなく

『万葉集』巻二 挽歌 158 高市皇子

と詠まれており、これは高市皇子が病で亡くなった異母姉である十市皇女に対して歌った挽歌である。山吹を十市皇女に見立て、会いたいが会えないという気持ち、山清水を汲みに行く道に例えて表現する。また、山吹の黄色と清水の泉のイメージから、黄泉を連想

させる歌であると一般的に解釈される。他にも、春の歌に

花咲きて 実^みは成らねども 長き日に 思^{おも}ほゆるかも 山吹^{やまぶき}の花

『万葉集』巻十 春 1860

とある。この歌は山吹の花を思ふ歌であるが、八重山吹が実をつけないことを前提として、或いは実らぬ恋を含意するものかとも考えられている⁽¹³⁾。また大伴家持の長歌に、

うつせみは 恋^{こひ}を繁^{しげ}みと 春まけて 思^{おも}ひ繁^{しげ}けば 引き攀^よちて 折^をりも折らずも 見^みむごとに 心^{こころ}和^なぎむと 繁^{しげ}山の 谷^や辺^へに生^おふる 山吹^{やまぶき}を やどに引き植^うゑて 朝露^{あさつゆ}に にはへる花^{はな}を見^みることに 思^{おも}ひは止^とまず 恋^{こひ}し繁^{しげ}しも

『万葉集』巻十九 4185 大伴家持

という歌がある。これは、恋の苦しみを慰めようとして庭に山吹を植えたが、見るごとに一向に思ひは止まないことを詠んだ歌である。恋心の慰めとしての山吹が描かれている。

次に『古今和歌集』に見られる歌を確認する。

山吹^{やまぶき}の花色^{はないろ}衣^えぬしや 誰^{たれ}へどこたへずくちなしにして

『古今和歌集』巻十九 雑体歌 俳諧歌 1012 素性法師⁽¹⁴⁾

この歌は、山吹のくちなし色に注目し、「くちなし色」と「口無し」をかけて、山吹には口が無いから「答えがない」という言葉遊びのような歌である。これ以降、山吹は「くちなし」の語やイメージと共に和歌に詠まれ、想いを内に秘め口を閉ざすという文脈で多く用いられるようになる。それは『狭衣物語』巻一で狭衣が源氏の君に對して密かに思いを寄せる心中を山吹にのせて表す歌、

いかにせん言はぬ色なる花なれば心の中を知る人はなし
『狭衣物語』巻一⁽¹⁵⁾

の如く、恋物語の文脈でより有用に扱われるようになる。

時代が下り、南北朝時代成立と推定される擬古物語『八重葎』は、山吹の使い方に特徴があり、かつ「形見の山吹」の類話として新たに提示できるものである。

待たれける鐘のつくづくとながめるたまふに、山吹色の幡の、これはまだはなやかなるを、昔の人に遣はしたまふ衣の色思し出でて、「もしやそれにやあらむ。亡き数に聞けば」と、類多かるものなれど、忘れず思しわたる筋なれば、うちつけになつかしき心地したまひて、立ち寄りて見たまふに、端の方にも書きたるやうに見ゆ。いとどあやしう御心とまりて、見たまへば、「花色衣身をしさらねば」と、あるを、かの人の手と見なしまふに、胸うち騒げど、「いかでさはあるべきことぞ」と、せめて見たまふに、……

このように山吹の花ではないが、「山吹色の幡」が重要なアイテムとなる。主人公中納言は母が病にかかって付き添っている間に、叔母にだまされて筑紫へ嫁ぐことになった女君が失意の内に亡くなったという話を聞く。悲歎に暮れる中納言は、母の湯治のために有馬へ行つた帰りに、難波に立ち寄り住吉に参詣する。供を連れて散策中に御津の寺に至り、その堂内に、古い幡が多い中まだ新しい山吹色の幡を見つける。それはかつて女君に贈つた山吹の衣で作つたものであり、女君の筆で文字が書き付けられていた。中納言はその山吹色の幡を見ることができ、どこか現実味の無かつた女君の死を改めて実感するのである。ここでは、山吹色の幡が女の死を象徴し、男にそれを突き付けて受け入れさせるものとして登場する。このような山吹の使い方は「形見の山吹」に類似するものである。

また、作者を二条良基に仮託された室町時代の歌学書『蔵玉和歌集』には、山吹の異名として面影草、鏡草という従来指摘のない名が載せられている。その由来となる物語の梗概も同時に載せられているが、これも「形見の山吹」の類話として新たに示されるものである。

面影草 山吹

故郷の面影草の夕はへやとめしか、みの名残ならまし
むかし男女あかずして別侍ける時。鏡に面影を互にうつして。此鏡をうづみ畢。其所より山吹生出けると云々。巨細

忘衣の物語にあり。

昔大和國奈良原といふ所にある男。山城國井手の里に住む女にかよひけり。互のこゝろざし不_レ淺して。たがひの親しかりて。初彼男女いひけるは。志雖_二深切_一。今よりは會事不_レ可_レ叶といひて。鏡を取出て。互に面影をうつして。若再會事あらん時は。此鏡をほり出すべしとて。籬の下にうづむ。後の年の春此所より款冬生出たり。男あはれにおもひて。不_レ斷此所に獨すみて歎ける。親此事を聞いて鏡をほり。とぎて又埋む。其年の秋又此所より槿花生出たり。其時この男さて。他の心ありとて忘けりと云々。

鏡草 同

面影をたかひにとみしか、み草忘衣の名残うらめし

子細同前。

『藏玉和歌集』春⁽¹⁷⁾

恋愛關係にあつた男女は、親の怒りによつて別れることとなる。その際にお互いの面影を映した鏡を庭に埋めたところ、翌春には山吹が生えてきたという。この話の典故とされている「忘衣の物語」の詳細は不明だが、愛し合つた男女がやむを得ず別れる、そして思いがこめられたものから山吹が生えてくるという趣向は、「形見の山吹」に類似する。また、「他の心あり」「名残うらめし」などであるようにこの恋は成就しなかつたようである。了意自身がこの話を知つていたかどうかは不明であるが、参考にしていた可能性はある。『藏玉和歌集』は写本であるものの現存するものが多く、元禄十四年

には出版もされることから、当時それなりに出回つていたものである可能性が高い⁽¹⁸⁾。

以上のように上代から続く和歌的伝統によれば、山吹はその花の美しさだけでなく、そこに女性の姿を重ねて詠むことができるものである。しかしそこに見られるのは、既に死んでいる女性や、想いを伝えられない相手であり、実らぬ恋のような恋愛の負のイメージを持つことが多いのであつた。

では、実際に「形見の山吹」における山吹の描写に関してはどうなっているのだろうか。

あまりのかなしさに、そのすみ一間のくづれたる壁を引のけしに、棹_{こし}にかけたる黄染_{きざし}の小袖の、竿_きにかけながら、地におちて朽_くたる跡_{あと}より、山吹の生出_{おこ}て、恨_{うら}みがほなる花の色_{いろ}の、ところ／＼に咲_さたるを見るに、朽_くてもものいろを忘れぬ形見の花とおもはれて、喜内_{きない}はいと、悲しく、血_ちの涙を流して啼_なげれども、くちなし色の花の名_なごりはこたふるこゑもなし。

注目すべきは、傍線部のように山吹の花に対して擬人法的表現が使われていることである。花の「恨みがほ」な様子は、喜内が訪れなくなり病に臥せた死に際の弥子のもとに届いた喜内との和歌の贈答、

関守のうちぬるほど、わびし夜も 今_{いま}はへだつる恨_{うら}みやなる
ふみ、ても恨_{うら}ぞふかき浜_{はま}千鳥_{ちどり} 跡_{あと}はかひなく残る夢の世

の「恨」の語を引いて、弥子の強い不満の表情を山吹の花に重ねている。「もとのいろを忘れぬ形見の花」とは、朽ちた黄染の小袖の色と同じ色の花を表していると同時に、「いろ」の語に「色情・愛情」の意味をかけて、小袖の持ち主である弥子が愛情を忘れていないことを暗に示している。そして「こたふるこゑもなし」は、悲嘆にくれる喜内に対して、「くちなし」色の花であるから答えることができないうことを示すと同時に、弥子自身が死人であり「口が無い」から答える手段を持たないことを示している。

読者はここまで恋愛関係の成立から一気に転落していく弥子と喜内の姿を目撃し、その中で弥子の死という最も強烈な負のイメージを持ったまま、形見の小袖に生える山吹の場面に直面するのである。三年という長い間、手紙のやり取りすらほとんど為されず、弥子の喜内への想いは伝えられずにいる。やがて想い患う弥子が逢えない恨みを和歌にしたためて死んでいき、その形見の小袖から山吹が生えている。先ほど確認した和歌的伝統に則れば、この山吹には弥子が重ねられていると捉えなければならぬ。そして、その死者の象徴である山吹が、幽霊の代わりに表れて人のように振る舞うとき、この山吹こそが死者そのもの、つまり霊魂であると捉えられるのではない。ただし、ここでの人のような振る舞いとは、あくまで喜内にはそう見えるということに注意しなければならない。喜内には山吹が弥子の霊魂のように見え、また読者にとっても文章表現上そのように捉えられるのであるが、現実の所は花でしかなく、弥子との再会が果たされたとは言いがたい。「形見の山吹」は、山吹によって『伽婢子』の他の恋物語に限りなく近い展開をするものの、そこ

には決定的な違いが存在するのである。

三、弥子が復活できない理由

「形見の山吹」における山吹とは、弥子の霊魂の象徴であった。しかしそれは、喜内にとってはそのように見えるというだけであり、また読者にとっても和歌的伝統からしてそのように捉えざるを得ないのであるが、それでも実際に幽霊として復活したわけではない。そこにあるのはあくまで実体を伴う山吹の花であり、死者ではないというのが、『伽婢子』における恋物語との大きな違いである。しかし、なぜ弥子は幽霊として登場しなかったのだろうか。塚野晶子氏は、「幽冥境を超越した恋人同士の対話場面という、愛情に起因する奇跡の代わりに、女の墓所の情景描写が挿入され、人の世のはかなさが強調される。また、仏道が恋愛の妄執を断ち切るための唯一の手段として位置づけられており、唱導的要素が恋愛の情趣を凌駕しているのである」と説明する。「唱導的要素の強調」という点については首肯されるものであるが、そこには作劇上のさらなる事情があるように思われるのである。

そもそも、『伽婢子』の女たちはなぜ幽霊として復活できたのだろうか。

君がかなしみなげく心ざし、黄泉よみにあれともたへかたくて、
今夜よるこゝに來り侍りと。

『伽婢子』 卷四―五「幽霊逢ふ夫話」⁽²⁰⁾

君が心に念願する所を感じて、司録神にいとまをこふてあらはれ来るとて、始終の事共なく物語して、

卷六―三「遊女宮木野」

君の事つゆわする、事なく、彦八が家にあるにあられず、しのび出てにげ来れり。日ごろのねがひ今すでにかなひ侍へりといふに、

卷七―五「死亦契」

みづから貞節の義に死せし事を天帝あはれみ給ひ、君が心さしにひかれて、今あらはれまいりたり。

卷八―三「哥を媒として契る」

これらの話は、死後「黄泉」「地府」へ行き、そこで「司録神」「天帝」に復活を許されるという展開が主である。中国白話小説のもとにしているため、中国風の名詞が目立つ。そして、そもそも「死後の世界」という非仏教的な存在を前提としていることも注目される。

また、共通するのは女の貞淑性であろう。特にこれらの女は、他の男に乱暴されそうなところを拒んで自害する、或いは死後も他の男に靡くことなく夫を想い続けるという、強烈な貞淑性を持つており、それ故に夫の歎きに感応し、「司録神」「天帝」といった存在に許され現世へと帰還する。『伽婢子』の女の幽霊は、その愛情による貞淑性ゆえに復活を許された存在なのである。特に最も「形見の山吹」に類似する「哥を媒として契る」は、原話『金鰲新話』「李生窺

墙伝」の「女に罪が無かったから」という復活の理由を「貞節に死したことを天帝が哀れんだから」と改編しており、その貞淑性は強調されている。つまりこの貞淑性こそこれらの話の教訓性の一つであり、復活という奇跡を起こす一因なのである。

しかし、「形見の山吹」に関してはどうか。この話の目的は一般庶民に対する仏教唱導に他ならない。物語結末は以下のように始まる。

かゝる世の中のだにはかなきを、今もし思ひこりずは、又いつの時を待つべき。世にしたがへば望みあり。かなはねばうらみあり。かりの色にまどひて、執心ふかく思ひみだれては、中々輪廻の妄念なるへし。そむきておこなはゞ、恋しかるべき弥子にも、来世にはさりともしつはちすの縁をむすぶも頼みありと、

草の茂る弥子の塚を見た喜内は、世のはかなさを思い知り発心する。ここで重要なのは、決して恋愛自体を否定し切り捨ててゐるわけではないということである。浮世の色情はかりそめのものであり、それに惑わされて執着してゐては、輪廻から抜け出すことは出来ないから、一度恋愛から目を離して仏道修行に励めば、恋しい弥子にも来世で極楽浄土に生まれ再会できると了意は主張する。つまり、恋しい人に会いたいのであれば、極楽浄土に行けば再会できるのだから、まずは仏道修行をしろなさいという、極めて現実的な主張なのである。そして、この主張ゆえに弥子の復活は許されないのである。

仏教的觀念から言えば、死後に待っているのは輪廻転生、或いは極樂往生である。例え弥子が喜内を想い続ける貞淑な女だとしても、中国的な「黄泉」「地府」といった死後の世界は想定されておらず、「司録神」「天帝」といった存在もない。本話の直接的な典拠は不明であるが、『太平記』から本文の引用を行っていることから、單なる中国説話の翻案という手法で作られておらず、日本的思想をもとに書こうとしていることが読み取れる。本話が中国的死生観から離れ、日本の仏教思想に基づいた、来世の極樂浄土での再会を唱導の目標にしている以上、現世で幽霊として再会してしまつては唱導が成り立たないのである。

無論、仏教において恋愛感情とは、最終目的である解脱の妨げとなるものである。それは、了意自身が著した仏書にも記されている。

仏道ノ中カ、世間ノ利欲、名聞ノ富貴ハ、全是菩提ノ障リ入理ノ妨也。何ゾ棄テ、行ヲセズハ、道ヲ得ルコト有レバカラス。(中略) 平等覺經ニハ、捨テニ妻子ヲ一断スニ愛欲ヲ一ト云ヘリ。別シテ云ハ、色愛ノ欲ヲ指ス。所レ謂ハ諸欲ノ中カニ最トモ棄難キ者ノハ、色愛ナルガ故ニ、(中略) 如クレ是ノ欲ヲ離レ愛ヲ断シテ、而シテ求道修學スル、是レヲ真ノ沙門ト名ク。

『無量寿経鼓吹』卷二十一—七「曾子問子夏之肥 付 離愛欲并」⁽²⁴⁾

仏教において、欲とは悟りの妨げになるものである。そして、色愛の情こそ最も捨て難い欲であるが、それを捨てて仏道に励んでこそ真の仏道者である。これが一般的な仏教での恋愛感情の捉え方である。

あり、了意も当然それに則っている。しかし、了意は「形見の山吹」においては恋愛を否定しなかった。そこには現実を冷静に見つめる了意の目がある。当然ながら、社会の存続という観点から言えば、男女の恋愛関係は不可欠である。一般庶民全体が恋愛を捨て去っているのは、社会が成り立たない。一般庶民からしてみれば、愛を捨て去るというのは現実的ではないのである。

時代を考えてみれば、『狗張子』の出版は元禄五年（一六九二年）であり、了意の死は序によればその前年である。当時の文壇には井原西鶴という文豪が登場して久しく、説教的な仮名草子は廃れ、娯楽要素の強い浮世草子が流行している。当時の市井には、浮世を華やかに過ごそうとする享樂的觀念が蔓延しているのである。了意が晩年に目撃していた世界はそのような状況であった。そのような中で、色情を捨て去り、一心に仏道修行に励むことを勧める説教は響かない。一般庶民に仏道修行を勧めるのであれば、より現実的を受け入れやすい説教を模索しなければならない。そうして生まれたのが、「形見の山吹」に見られるような、恋愛を否定せず、仏道修行によつて再会することができるという説教なのではないか。

「形見の山吹」から奇談・怪談の要素が抜け落ちてしまったのは、塚野氏の言うように仏道が恋愛の情趣を凌駕したというだけではなく、愛するものとの死別という一般庶民にも起こりうる現実的な悲劇を主題にして、再会することを目標とした仏道修行へと導くという新たな説教の形を生み出したからであった。

四、おわりに

「形見の山吹」は、仮名草子の例にもれず和歌的伝統に則って作られている。物語導入から山吹に関連させた語や文をちりばめ、山吹が伝統的に持つ恋愛の負のイメージを想起させ、弥子を復活させず、山吹と弥子の魂を重ねて捉えられるような工夫がなされている。弥子が幽霊として復活することがなかったのは、浮世を華やかに過ごすとする一般庶民たちへの唱導のために、恋愛を否定せずに仏道修行を勧めるための展開として作り上げようとしたためであると推察できる。

了意の作家活動の最終目的は、仏教唱導である。奇談・怪談的要素を取り扱ったのは、それを行うための一手段に過ぎない。逆に言えば、仏教唱導の目的さえ達成されれば、物語の展開上奇談・怪談的要素が欠落していても、何も問題はなかったであろう。むしろ、『伽婢子』の他の恋物語と同様に幽霊としての復活を期待させつつ、それを裏切る形で仏道修行を促す構成は、仏教唱導としての効果をより一層強めたのかもしれない。

『狗張子』は時代を鑑みれば、最後の仮名草子と言っても過言ではない。当時、説教色の強い作品は次第に廃れ、人々の享楽を肯定するような作品が多く広がっている。人生の大半を作家活動による勧進に捧げてきた僧侶了意にとっては、憂慮すべき事態であったろう。しかし、これまでのような作品では勧進という目的は達成し難い。仏道修行から遠く離れていく時流に対し、どのように勧進して

いくのか。「形見の山吹」では、一般的な仏教思想における恋愛への観念を一旦捨て、より現実的で受け入れやすい思想を取り入れた。このような工夫は、おそらく「形見の山吹」だけにとどまらない。詳細な検討がされていない話の中には、このような工夫が凝らされているものがあると思われる。今後、これらの検討を重ねていきたい。

注

(1) 以下「狗張子」の本文は『浅井了意全集 仮名草子編5』（岩田書院、浅井了意全集刊行会・編、二〇一五年）による。また、以下引用文の傍線は筆者による。

(2) 富士昭雄「浅井了意の方法―狗張子の典拠を中心に―」（『名古屋大学教養部紀要A 人文科学・社会科学』11、一九六七年三月）や、同氏「伽婢子と狗張子」（『国語と国文学』48、一九七一年十月）。

(3) 土屋順子「『狗張子』の和歌」（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』9、一九九九年三月）によれば、『狗張子』内の和歌は大半が『明題和歌全集』『和歌題林愚抄』に収められているものである。また、同氏「『狗張子』考」巻二一五「形見の山吹」を中心に（『大妻国文』30、一九九九年三月）では、本文の一部に『太平記』から引き写している部分が存在し、その際不要な文言まで引用してしまった部分があると指摘されている。

(4) 太刀川清『牡丹灯記の系譜』(勉誠社、一九九八年)では、「牡丹灯籠」の幽霊と「形見の山吹」の女の名前がどちらも弥子であり、歌を中心にした逢瀬という点で同じ「牡丹灯記」を利用していると指摘する。

(5) 常吉幸子『伽婢子』における『恋愛譚』と和歌的伝統(「活水日文」36、一九九八年十月)では、「中世末から近世初頭の恋物語は、平安朝の色好みの世界への憧憬からなっている。そして、そのことは、それらの御伽草子、仮名草子の内実の貧困の、原因でもあり、結果でもあったと言えるだろう。それらの物語は、宙に浮いたような色好みの意識と、土俗的な子宝願望や、神仏への信仰、仏教思想等とのちぐはぐで不自然さわまりない複合体をなしている。そしてその「恋物語」としてみた場合の救いがたい貧困の補填と、「文芸らしさ」の粉飾のために、和歌と和歌的知識が盛り込まれ、物語の展開に組み込まれて独特な世界を構成するのである。」と説明する。

(6) 「歎冬」とは「山吹」の異名である。『和名類聚抄』(九三―九三八年頃成立)の「歎冬」の項に「万葉集云山吹花」とある。

(7) 江本裕『「狗張子」注釈』(二)「大妻女子大学紀要 文系」32、二〇〇三年三月

(8) 『金葉和歌集』の本文は『新日本古典文学大系9 金葉和歌集 詞花和歌集』(岩波書店、川村晃生・柏木由夫・工藤重矩・校注、一九八九年)による。

(9) 『平家物語』の本文は『新編日本古典文学全集46 平家物語②』(小学館、市古貞次・校注・訳、一九九四年)による。

(10) 石川透「浅井了意筆奈良絵本・絵巻の存在」(『中世文学』47、二〇〇二年六月)によれば、筆跡鑑定により神奈川県立歴史博物館蔵本の奈良絵本『平家物語』が了意自筆版下だとされる。

(11) 以下『万葉集』の本文は『新編日本古典文学全集6』9 万葉集①④(小学館、小島憲之・木下正俊・東野治之・校注・訳、一九九四―九六年)による。

(12) 注11前掲『新編日本古典文学全集』の注釈や、伊藤博『萬葉集釋注 一―十』(集英社、一九九五―一九九九年)

注12前掲の注釈書類による。

(13) 『古今和歌集』の本文は『新編日本古典文学全集11 古今和歌集』(小学館、小沢正夫・松田成穂・校注・訳、一九九四年)による。

(14) 『狭衣物語』の本文は『新編日本古典文学全集29 狭衣物語①』(小学館、小町谷照彦・後藤祥子・校注・訳、一九九九年)による。

(15) 『八重葎』の本文は『中世王朝物語全集13 八重葎 別本八重葎』(笠間書院、神野藤昭夫・校訂・訳注、二〇一九年)による。

(16) 『蔵玉和歌集』の本文は『群書類従・第十六輯 和歌部』(続群書類従完成会、塙保己一・編、一九三四年)による。

(17) 『補訂版国書総目録 第五卷』(岩波書店、一九六七年)によ

る。『草木異名抄』『葳玉抄』などの名で写本が存在する。

(19) 塚野晶子「『狗張子』論——その恋愛物語を中心に」(『早稲

田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』13—2、二〇〇六年三月)

(20) 以下『伽婢子』の本文は、注1前掲『浅井了意全集 仮名草子編5』による。

(21) 「地府」の語は卷六―三「遊女宮木野」の「貞節孝行の徳により、天帝・地府われを褒めて男子となし、…」による。

(22) 『金鰲新話』は、早川智美『金鰲新話 訳注と研究』(和泉書院、二〇〇九年)による。「李生窺牆伝」には「天帝以妾與生縁分未斷。又無罪障。假以幻體。與生暫割愁腸。」(天帝、妾と生と縁分未だ斷えず、又罪障無きを以て、假に幻體を以て、生と暫し愁腸を割かしむ。)※筆者による書き下し)とある。注3前掲、土屋順子「『狗張子』考」卷二―五「形見の山吹」を中心に」による。

(24) 『無量寿経鼓吹』は『浅井了意全集 仏書編2』(岩田書院、浅井了意全集刊行会…編、二〇〇九年)による。翻刻は筆者による。なお便宜上、筆者により句読点を付してある。